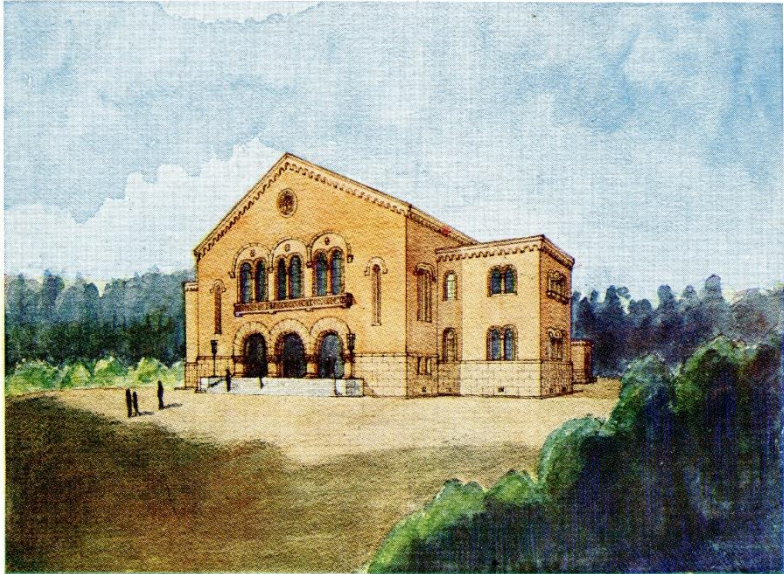


『赤い三角屋根』誕生—国立大学町開拓の景色—展
 展示資料の紹介-6



（定塚の來出廓外に中年本）堂講大大商の中築建に盛下目

此の町は日に日に藝術的な立派なものに創造されてゆきます。此の町は日に日に藝術的な立派なものに創造されてゆきます。此の町は日に日に藝術的な立派なものに創造されてゆきます。

新宿發	国立著
前 5.30	前 6.12
6.58	7.39
8.35	9.16
9.34	10.15
10.35	11.14
後 12.22	後 1.03
1.58	2.42
3.22	4.04
4.58	5.39
6.22	7.03
7.46	8.27
9.22	10.08
10.22	11.03

此の町は日に日に藝術的な立派なものに創造されてゆきます。此の町は日に日に藝術的な立派なものに創造されてゆきます。此の町は日に日に藝術的な立派なものに創造されてゆきます。

資料 1 絵葉書：国立案内「目下盛に建築中の商大大講堂（本年中に外郭出来の予定）」
 大正 15（1926）年 くにたち郷土文化館所蔵



（定塚の來出廓外に中年本）堂講大大商の中築建に盛下目

新宿發	国立著
前 5.30	前 6.12
6.58	7.39
8.35	7.16
9.34	10.15
10.35	11.14
後 12.22	後 1.03
1.58	2.42
3.22	4.04
4.58	5.39
6.22	7.03
7.46	8.27
9.22	10.08
10.22	11.03

国立は打續く百萬坪の松林の中に東京商科大学や東京高等音楽學院を中心とした品位ある教育町です。茲には豪華な邸宅を建てれば松林を長屋もありませぬ風致を害す音曲もなければ露の香りもありません。妙なる音響は松林に和して常に吾等の心を慰めます。

今や涼冷の風赤松林をわたつて七草の美しい国立はもう秋で御家族御仲間御敬愛を乞ふ。

省電も近く國分寺から国立へ延長し東京驛と直通します。目下は国立へ行くには電車なら國分寺驛下車驛前の聯合自動車(五分)が国立へ行きまます。また、成るべく新宿發中央驛の汽車を利用下さい。

資料 2 絵葉書：国立案内「目下盛に建築中の商大大講堂（本年中に外郭出来の予定）」
 大正 15（1926）年 くにたち郷土文化館所蔵



左：資料1の宛名面
右：資料2の宛名面

資料1と2は、いずれも「目下盛に建築中の商大大講堂（本年中に外郭出来の予定）」と題してその図を掲載した箱根土地株式会社（以下「箱根土地」とします。）による国立案内の絵葉書です。

その宣伝文をみると、「国立は教育の聖都郊外安住の地です」（資料1）、「国立は打続く百万坪の松林の中に東京商科大学や東京高等音楽学院を中心とした品位ある教育町です。」（資料2）と述べており、いずれも国立の分譲において「教育」をアピールポイントにした案内であることが窺われます。資料2では、「孟母の三遷とか、よき環境の裡に子女の教育を念とせらるゝ御家庭は速に御来住あらん事を!!」と謳っており、孟母三遷の故事¹を引き合いに出して、教育の町として好環境にある点をより強調しています。

この箱根土地による国立案内の絵葉書。いつごろ作成されたものでしょうか？

いずれも図を掲載している「商大大講堂」（兼松講堂）を「建築中」としています。兼松講堂は、大正15（1926）年8月6日に起工、昭和2（1927）年8月31日には竣工しています²ので、その間の宣伝に用いられた絵葉書であろうと、まずは押さえることができます。

さらに資料1では、宣伝文の冒頭で次のように述べています。

「商科大学の専門部と商業教員養成所が愈々来る四月より国立の新校舎で開校と本日発表されました。」

東京商科大学（現 一橋大学）の商学専門部と商業教員養成所は、昭和2年4月に現在の一橋大学東キャンパスに移転しました。「愈々来る四月より国立の新校舎で開校」と移転前における記述をなしていますので、昭和2年3月以前まで時期を絞り込めるでしょう。

¹ 孟子の母が教育環境のよい所を求めて三度居を移した故事。初め墓地の近くに住んだが、孟子が埋葬のまねをしたので市中に移ると、今度は商売の遊びをした。そこで学校の近くに引っ越すと、礼儀作法を習うようになった（『全訳 漢辞海 第四版』2017年8月10日、三省堂）。

² 依光良馨『大学昇格と籠城事件』（社団法人 如水会、1989年3月31日）282頁。

では、この4月移転が発表された日とはいつなのでしょうか？

東京商科大学の大学新聞である『一橋新聞』には、この日付を押し量れそうな記事を見出すことができます。同新聞の第43号および第44号で報じられているところに拠ると、同大商学専門部等の国立移転が公表されたのは、大正15年11月22日であったようです³。とすれば、資料1の絵葉書が作成された時期も、この11月が有力となってきます。では11月とみて、宣伝文の他の記述と齟齬をきたしてはいないでしょうか。

他に時期が絞れそうな記述としては、大正15年7月に新築披露の演奏会が行われた「音楽堂」（国立音楽堂）を既設施設として述べている点、大正15年の2学期から国立へと移転してきた東京高等音楽学院（現 国立音楽大学）と、同年4月に開校した「国立小学校」（国立学園小学校）について「已に開校しました」と述べている⁴点などがみられます。なお、ちょっと変り種なところでは、「百万坪の国立全体が美しい松林の大公園をなして政府から禁猟区域として指定された位です。」との表現があります。これは箱根土地の第13回報告書にある、警視総監より大正15年5月22日に許可された国立大学町における銃猟禁止区域設置のこととみられます⁵。いずれも大正15年11月より前に既設・既定となっている内容であることが分かります。さらに、「都会の風塵をよそに御家族御同伴秋光漲る平和の聖都を御視察下さい。」とする最後の一文。この「秋光漲る」をも加味すれば、資料1の作成時期は大正15年11月頃とみてよいのではないのでしょうか⁶。

では、資料2はというと、こちらは作成時期を絞る決め手となる記述が少ないのです。

ただ、「今や涼冷の風松林をわたつて七草の美しい国立はもう秋です」とありますから、秋頃の作成とみてよいでしょう。前述のとおり、昭和2年8月に兼松講堂は竣工していますので、これを「目下盛に建築中」と記す秋であれば、大正15年の秋と推定されます⁷。

この作成時期を踏まえて資料1・2の図を改めてみてみましょう。

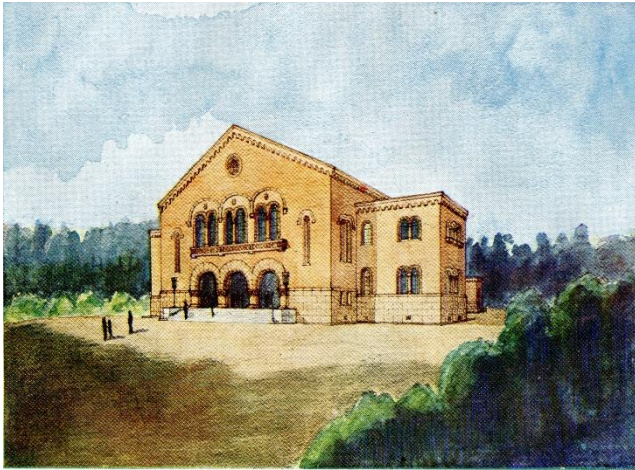
³ 『一橋新聞』の第43号（大正15年11月22日）2面「専門部移転は本廿二日当局より正式に発表の予定」では、「明春四月の新学期から、分館敷地が取払ひとなるため、校舎の狭あいを生じ商学専門部が国立に移転することに内定し、（中略）本日〔大正15年11月22日：引用者〕奈佐主事より専門部生徒に対し正式に移転決定の発表があるはず」と報じており、第44号（大正15年12月1日）2面「陽春四月の新年より専門部が国立へ移転」でも、「本建築落成までは箱根土地よりの寄付建物を利用して専門部および養成所全部を移転せしむることとし、（中略）、廿二日正式にこれを公表する運びとなった」と記されています。

⁴ 東京高等音楽学院は新宿の仮校舎で大正15年4月に開校しています。同年の2学期から国立へと移転しますが、箱根土地の宣伝などではこの国立移転をもって同校の開校を謳うものがありますから、本資料の表現も国立へと移転してきたことを示すものと考えられます（展示資料の紹介・4 註3参照）。

⁵ 「大正十五年五月二十二日東京府北多摩郡谷保村（国立大学町）経営地内ニ銃猟禁止区域設置ノ件警視総監ヨリ許可アリタリ」（箱根土地『第拾参回報告書』（大正15年上半期：大正14年12月1日～大正15年5月31日）4頁）。

⁶ 掲載されている「汽車時刻表（改正）」にある汽車の発着時間は、鉄道博物館所蔵の『汽車時間表附汽船自動車発著表』大正15年11月号（鉄道省運輸局編纂）記載の時間と合致しています。

⁷ 本展示図録31頁において、資料1・2の絵葉書の年代を「昭和2（1927）年」と表記しておりますが、「大正15（1926）年」に訂正させていただきます。



(定塚の來出廓外に中年本) 堂講大大商の中築建に盛下目

資料 1 の図の部分



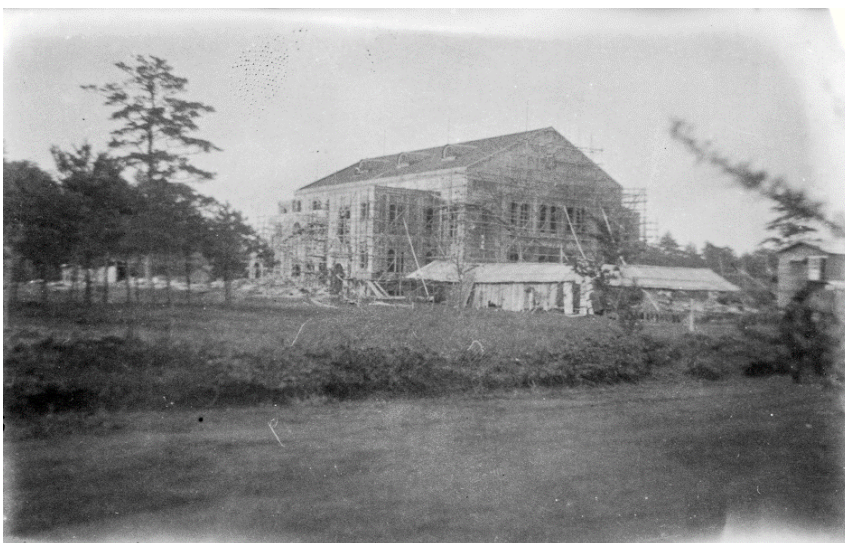
(定塚の來出廓外に中年本) 堂講大大商の中築建に盛下目

資料 2 の図の部分

ご覧のように、資料 1 は兼松講堂の写真ではなく彩色画です。

それはそうですね。なにせ 8 月に起工したばかりの大きな建物が、11 月頃にここまで完成しているのも早過ぎの感があります。一橋大学西キャンパスにある兼松講堂をご存じの方なら、あの建物が 3 ヶ月程度でできるとはちょっと考えづらいでしょう。『一橋新聞』第 40 号（大正 15 年 10 月 1 日）でも、「工事も今やほとんど基礎工事を半すぎ完成するまでに進んである」と基礎工事の進捗状況を述べていますが、続けて「予定通り向ふ一ケ年以内には遅くも進工を見るに至る」⁸と 1 年程度の工期予定を示しています。

図の括弧書にある「本年中に外郭出来の予定」は、かなり性急な予定にも感じられますが、大正 15 年にどの程度「外郭」ができていたのかはつきりしません。外郭を外囲いとみれば、足場ぐらゐは年内に組まれていたかもしれません。建物自体の外壁などを指すとみれば、まだまだ出来上がってはいなかったでしょう（資料 3 参照）。ここら辺はいずれにも解される言葉を巧みに選んで宣伝していたのかもしれません。



資料 3

建築中の兼松講堂 昭和 2（1927）年
明窓浄机館所蔵（中島陟資料）

展示資料紹介-4 でも紹介した資料。
昭和 2 年 4 月 29 日に撮影されたとみられる 1 枚。

⁸ 『一橋新聞』第 40 号（大正 15 年 10 月 1 日）2 面「兼松大講堂の基礎工事始る」。

では、資料 2 はどうでしょうか。こちらは着色された写真が用いられています。松の樹々の奥に写されている建物は、ある程度完成しているようにみえます。外壁や屋根が仕上がっている様子となると、つい先ほどまで述べていたことと話が違ってきます。

資料 2 の建物を改めてよ〜くみてください。ロマネスク様式をまとった兼松講堂の外観とは少々趣が異なるように感じませんか。実はこの写真、兼松講堂ではなく、現在の一橋大学東キャンパスに建設された東京商科大学商学専門部の校舎を撮影したもののなのです。この商学専門部の校舎は箱根土地によって寄付されたものでした⁹。

この度の展示資料にも、この絵葉書の校舎が収められた写真がみられます（資料 4・5）。



資料 4 東京商科大学商学専門部建築工場 大正 15（1926）年
明窓浄机館所蔵（中島陟資料）

建築工場の標識柱の左奥に、絵葉書掲載の校舎が建築中であるのがみえます。



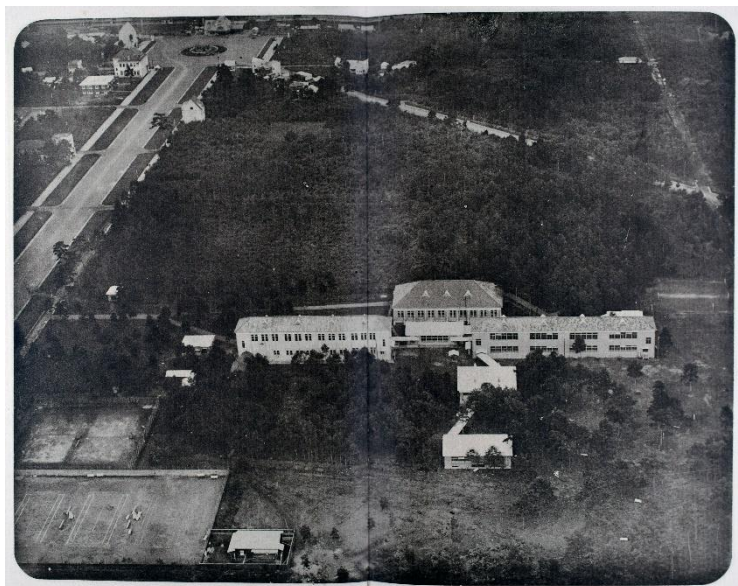
資料 5 東京商科大学商学専門部移転記念祝賀会 昭和 2（1927）年
明窓浄机館所蔵（中島陟資料）

建築工場の標識柱の右奥に、絵葉書掲載の校舎がみえています。

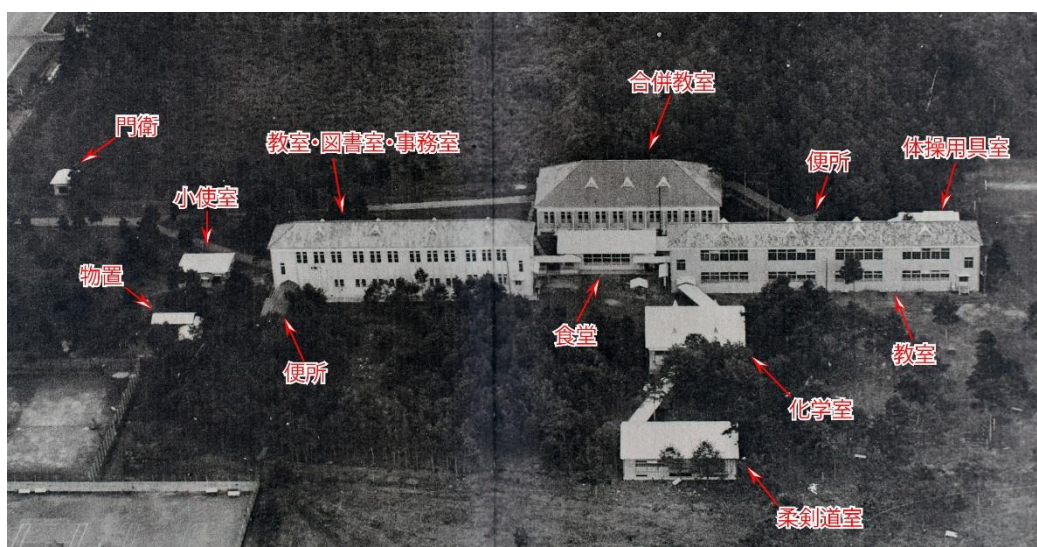
⁹ 前掲註 3『一橋新聞』第 44 号の記述参照。

なお、『一橋新聞』第44号（大正15年12月1日）では商学専門部の校舎について次のように述べています。

「ちやう落〔凋落：引用者〕の風に荒む国立の一橋大通を西側にして商学専門部新校舎がそゞたる姿を松柏の間に現してゐるが、岡本組の努力により明春二月末を期し完成を見やうとしてゐる、東教室、食堂、化学室、柔剣道場、便所等七棟の本建築落成を待ち取払ひとなるべきもの以外の半永久的建物五棟は仕あげにかゝらぬばかりに進行してゐる、ペンキの香高い二階建二棟の教室合計十六室は四間七間廊下一間といふ構図で、南光を一杯容れ純白の壁に照り反へし小鳥のメロデーを耳にし得る趣あるものであるがその内図書室、職員室、事務室等に充当せらるゝことゝなるから商品陳列室、雨天体操場、生徒控場の不備と共に不足の憾みがあるものゝ忽卒として移転するものゝ無理ならぬ不便であらう」¹⁰



資料6 東京商科大学商学専門部校舎
『東京商科大学 商学専門部 卒業記念写真帖』より
昭和3（1928）年頃 くにたち郷土文化館所蔵



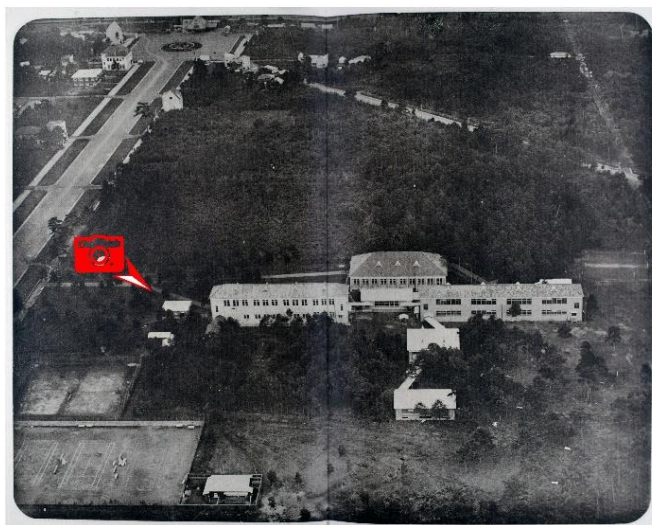
資料6の拡大・加工：『商大校舎新築設計図 配置図』（国立市所蔵・プリンスホテル旧蔵資料）に基づき表記

¹⁰ 『一橋新聞』第44号（大正15年12月1日）2面「新装に程ない楚々たる新校舎」。

資料 2 の絵葉書に掲載されている写真は、国立の東側学校用地において、門衛の先辺りから小使室と教室・図書室・事務室を撮影したものであったようです。

冒頭で述べたとおり、この度紹介した箱根土地による 2 枚の絵葉書は、国立を教育町として宣伝することで分譲地の販売促進を狙って作成されたものとみられます。

そこには東京商科大学で建築が進められていた兼松講堂の存在を通じて、国立における教育施設の充実をアピールする、そのような意図があったと考えられます。



資料 6 を加工：資料 2 の撮影方向を推定



資料 2 の図の部分



参考資料：『一橋新聞』第 44 号（大正 15・1926 年 12 月 1 日）2 面

「七百の若人を待つ 国立の学園都市」

一橋大学附属図書館所蔵

これらの絵葉書作成時には、兼松講堂はまだ完成していなかったため、彩色画を用いたり（資料 1）、他の校舎の写真を利用（資料 2）して絵葉書を構成したのでしょうか。国立の土地分譲における販売促進戦略として、当時の箱根土地が「教育」に重点を置いていたことを窺わせしめる資料といえるでしょう。

【余談ですが…】

この度の展示資料紹介にあたり改めて調査資料を確認していたところ、興味深い記事が目にとまりましたので、補足してご紹介します。

『一橋新聞』第 55 号（昭和 2 年 7 月 18 日）2 面では兼松講堂がこの年の 8 月上旬に竣工の見込みである点など、兼松講堂に関する記事が掲載されています。そのひとつに「伊東博士の努力で経費以上の素晴らしさ」と題する記事があります。ここでは、兼松講堂内部の装飾について、「経費にも似合はぬ素晴らしいものが出来上る事となる」と述べており、「これは実に兼松商店東京支店長の林氏の配慮、工事を請負った竹中工務所の骨折、殊に設計者伊東博士の尽力は大したものので内部の装飾などには自ら一々手を下され」たことに拠るのだと記しています。そして「中でも講堂正面の上部に掲げられる徽章と同型の直径七尺の大マーキュリーは幾度かの書直しを行つたが尚意に充たない所があるとてつひに博士自ら直接に彫刻されたものであると」と報じています。

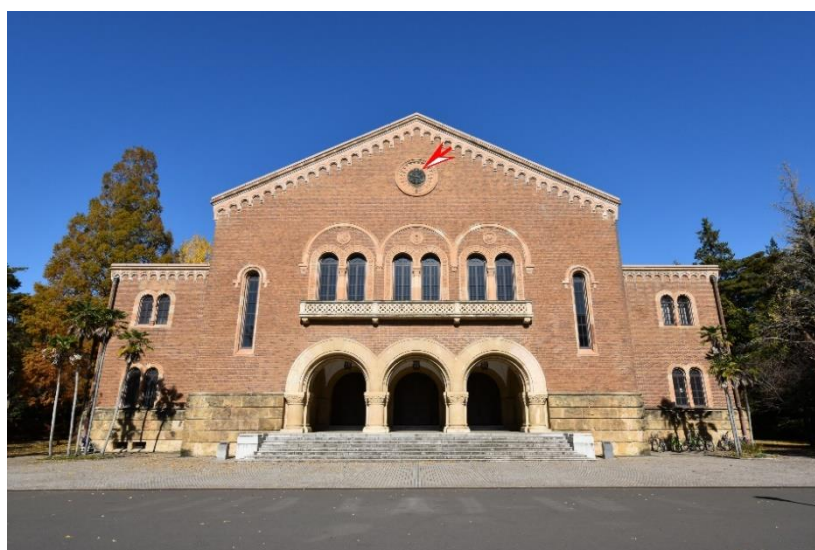
兼松講堂の正面上部を眺めてみると、一橋大学の校章があしらわれているのが分かります。この校章「マーキュリー」は、ローマ神話の商業、学術などの神メルクリウス（英語名：マーキュリー）の杖を図案化したもので、一橋大学の前身である東京商業学校が高等商業学校に昇格した明治 20（1887）年頃に制定されたもののようです¹¹。

『一橋新聞』の記述に拠れば、兼松講堂正面の破風下にポイントとしてあしらわれている校章は、伊東忠太氏が直接彫刻をなしたものであるとのこと。建築家・建築史家として著名な伊東忠太氏が設計した兼松講堂は、現存する伊東作品のひとつとしてよく知られた建物です。新型コロナウイルス感染症が収束した暁には、伊東氏が意を尽くしたマーキュリーを見どころのひとつとして、兼松講堂を鑑賞してみるのも面白いのではないのでしょうか。



伊東忠太氏

国立国会図書館デジタルコレクション
伊東忠太『日本建築の研究』（上）
伊藤忠太建築文献第 1 巻より



兼松講堂：2019 年 11 月 29 日撮影分を加工

【2020.05.07：中村記】

¹¹ 一橋大学ホームページ「校章マーキュリーの由来」(<https://www.hit-u.ac.jp/guide/outline/emblem.html>)